

日本における日口非戦論

梅田 俊英



よろしくお願い致します。ただ今お2人の報告がございましたが、私のこれからの報告はあれほど立派な論文として出ているような話ではなくて、現物を見ていただくという、砕けた調子でやりたいと思います。「日本における日口非戦論」ということですが、本年は日口戦争講和100年と同時に、日口非戦論の100年でもあります。ここで私の話は非戦論を中心にお話しします。

非戦論とは何か、仮に定義しておきますと、戦争そのものを否定するものが非戦論だと考えます。この非戦論は例えば日清戦争の時にはありませんでした。あの有名な内村鑑三も日清戦争については否定しないという状況がありました。そして日口戦争の非戦論が登場し、大正、昭和になると今度は非戦論ではなく反戦運動という運動で、社会主義の思想と結びついて、幅広い意味での社会主義運動の中の1ジャンルとして活動が行われています。そういう意味では、非戦論が登場した日口戦争は、歴史的な存在であると言えます。

日口非戦論といいますと、ご承知の通り、与謝野晶子、内村鑑三、平民社の人々、つまり幸徳秋水などの人々です。教科書にも載っているのが与謝野晶子であるし、内村鑑三ということになります。ここではその他に矢部喜好という、日本最初の良心的兵役拒否者の思想を紹介したいと思います。矢部喜好に関してはある程度研究が進んでいまして、戦前に伝記が出されました。戦後になって、後で述べる鈴木範久先生による最初の良心的兵役拒否として、「矢部喜好平和文集」が出されていて、かなり知られるようになりました。また、例えば『非暴力で平和を求める人たち』という本の中にも、矢部喜好が日本で最初の良心的兵役拒否者であることの項目が出ています。大月書店から目良誠二郎さんの文で石井勉さんの絵で出されている、言わば非暴力の反戦を訴える絵本（『非暴力で平和を求める人たち』大月書店、2003年）が出されるまでになっています。

それでは最初の良心的兵役拒否者である矢部喜好についてご紹介したいと思います。いま申し上げたように、矢部喜好に関しては、元立教大学教授・鈴木範久編『矢部喜好平和文集 最初の良心的兵役拒否者』（教文館、1996年）で幅広く広がりつつあるということで、ぜひとも与謝野晶子、内村鑑三並みに知られていくといいかと思っています。

矢部喜好は1884年に生まれて、1935年に亡くなっています。断っておきたいのですが、日本最初の良心的兵役拒否は日口戦争の時、それ以後にも自主的なものはありましたが、戦前の日本にその制度はなかったということです。現在においては、例えばドイツなどで良心的兵役拒否は制度としてあります。兵役に就きたくないという場合は、その代わりに同じ期間、福祉施設などで働くというような代替手段が制度としてあります。ですから、矢部喜好は、制度がないなかで自分で勝手に

やったという意味での良心的兵役拒否者ということになります。

前に述べたように、矢部喜好は1884年に、福島県耶麻郡木幡村に生まれました。お父さんは小学校の校長先生をやった後は材木商という、それなりに中堅の家柄でした。1898年には会津中学校に入学します。勉強は大変できたようです。1898年という進学はそんなにたくさんしたものではないのですが、それなりに勉強はできて、3年間続けて特待生ということです。

ところが、1902年の秋に町を歩いていたら欧米の人が、今になってみれば賛美歌でしょうが、怪しい歌をうたいながら歩いている。「これは何だ？」ということで、矢部喜好は興味を持って、末世の福音教会（セブンスディ・アドベンティスト）という教会に初めて接します。そして同じ年だと思いますが、卒業時に父の材木工場が火事で焼け、家が没落してしまい、会津中学校の学費さえ出すことができないという状態におかれました。

こうして、翌年3月15日に洗礼を受け、キリスト教の伝道者になることを決意します。そして1903年3月に聖書を持って伝道中、偶然に幸徳秋水の家に行き当たって、キリスト教を伝道しようとするわけです。幸徳秋水の方から「面白い男だね、また夜に来てくれ」ということで再度出むいて会見をしたということです。

幸徳秋水は妻、千代子を顧みて言います。「お前とは違って本物のクリスチャンがおいでなすった」。実は千代子はキリスト教徒なのです。「本物のクリスチャンがおいでなすった。今夜はひとつお説教を謹聴するのだが、お前も傍聴させていただくがよい」。そこで幸徳秋水が「耶蘇に降参した顛末を聞かせてくれ」と言うわけです。これは前述の鈴木先生のご本に含まれている自伝からとっています。「私はなにくそと思って逆襲した。あなたから社会主義に降参した話をして下さい」。「降参か、こいつは一本参った」と、「無邪気に笑って彼は少年時代に社会制度の不公平に憤慨して、この運動に身を投じるに至った経験を話してくれた」そうです。そして矢部は、「唯物論的社会主義で本当の救いにあずかれる道理はありません。あなたも悔い改めてキリストに降参したらどうですか？」と言うわけです。そうすると「君のように単純に信仰ができれば俺も幸福なのだがなあ」、「彼の頬に淋しい影があった」というやりとりがあります。このやりとりから、幸徳秋水も矢部喜好もお互いに敬意を払っているということが分かると思います。

こうして1905年3月16日に召集不応の罪に問われ、若松裁判所で禁固2ヶ月の判決を受け、3月23日、若松監獄に収監されました。そして5月22日に釈放されています。

そして1905年5月31日、仙台の第29連隊に看護兵（卒）として入隊します。これは、良心的兵役拒否の代わりに、こういう看護兵とか福祉施設とかで代替の仕事をするということが偶然成り立っているということです。

では矢部喜好はどう考えていたかと言うと、非常にシンプルです。前に述べた本の帯にもありますが、どうして兵隊に参加しなかったのかと言うと、「聖書に書いてあるからだ。聖書に人を殺すなど書いてある。だから私は兵隊にはならない」というシンプルな考え方に立っています。聖書の教えに従って世界の平和を祈願する者には、他国の人々と戦うなど到底できるものではない、というわけです。「私の近所から出征した軍人が戦死した。家の中からは忍び泣きが聞こえる。敵国ロシアの軍人にも家族がいるはずだ。私の撃った弾でロシア兵が死ねば、その遺族にもこんな悲しみを味あわせるだろう。それなら自分が殺されても、そんな罪は犯してはならないと決心した」とい

うのです。相手に弾が当たれば死ぬ、遺族が悲しむという非常にヒューマニズムな立場に立ったところから、兵役を拒否したということです。

その後、アメリカに渡って神学の勉強をなさる。そして滋賀県の膳所町に伝道所を開きました。伝道所と言っても本当にバラックのような小屋のようなものだったというように書いてあります。

そして1927年、賀川豊彦、杉山元治郎の2人は、日本農民組合の創設者ですが、この人たちと日本農村伝道団を結成する。そして晩年には福島県で農民福音学校を開くということで、生涯を閉じられました。以上のように、矢部喜好は農民と常に接触していたために、生涯に渡って絶対的非戦論を貫くことができたのではないかと思います。これが矢部喜好の話です。

次は、日ロ非戦論の展開の話に入りたいと思います。まず一般的教科書のようなものですが、1903年に萬朝報が非戦論から主戦論に転換したことをもって、記者の内村鑑三、幸徳秋水、堺利彦の3人が退社します。内村鑑三は『聖書之研究』などの雑誌によって非戦論を展開し、幸徳、堺らは平民社を結成しました。そして週刊『平民新聞』を発刊するわけです。なかなかよく売れて、数千の部数を誇る時期もありました。大原社研に『平民新聞』の現物があります。実はこの週刊『平民新聞』には「大逆文庫」というハンコが押してあります。「大逆事件」の「大逆」ですが、この謂れは幸徳秋水の遺品も含めて堺利彦が命名したもので、大逆事件に抗議をすることによって「大逆文庫」という蔵書となりました。後に、堺から向坂逸郎先生の文庫に大逆文庫が収まり、向坂文庫の蔵書がほぼ全て大原社会問題研究所にやって来ました。

現在、法政大学の多摩校舎に大原社研がございます。その謂れを申しますと、正式には法政大学大原社会問題研究所と言います。戦後法政大学に移管されましたが、元は、倉敷にございます倉敷紡績の社長をやっていた大原孫三郎さんがお金を出していろんな研究所を作りますが、その中の1つでした。倉敷の大原美術館と系統は同じです。大原社会問題研究所を紹介する時は、「あの大原美術館と同じ人が作った研究所である」と紹介すると通りがいいということがあります。向坂文庫についてはすでに目録もできていますから、ご利用いただければ幸いです。

つづいて、年代を追う形で解説をします。まず3月13日、幸徳秋水が「露国社会党に与ふる書」というものを週刊『平民新聞』18号に書きました。そして翌号の19号には英文欄に翻訳が載って、世界に感銘を与えました。そしてロシア社会民主労働党機関紙『イスクラ』第65号にこれが全文翻訳され、その回答は「露国社会党より」として週刊『平民新聞』第37号に出ています。今、後ろの方に週刊『平民新聞』の18号、幸徳秋水の「露国社会党に与ふる書」というのが開いてありますので、参照していただければと思います。

5月には平民社の一員である木下尚江が『火の柱』を刊行します。そして8月14日には第二インターナショナル・アムステルダム大会がありますが、その時に片山潜とロシア代表のプレハーノフとが友好の握手をしています。握手の写真はありませんが、真ん中にバッテン印があるのが片山潜です。何からとったかと言いますと、片山潜の『日本の労働運動』の中の写真です。すぐ右のヒゲの方がプレハーノフです。握手写真があると一番いいのですが、残念ながら、こういう集合写真しかありません。これは大変有名な写真と言えるでしょう。

つづいて、アムステルダム大会での発言について述べますが、その前に以下のことを紹介したいと思います。『平民新聞』にアムステルダム大会の様子が詳しく載っているのは当然ですが、それ

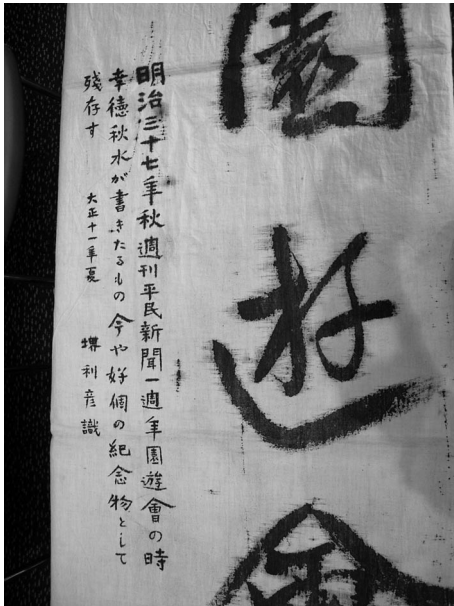
だけではなかったということです。それを証拠立てたいと思い、探したら『誠友』という雑誌で、それにもこういう記事が載っていました。活版工組合、「誠友会」の機関誌ですが、彼らが『平民新聞』を見ているかどうかということですが、おそらく見ていないでしょう。実は活版工の人たちは外国語が読めるのです。印刷工の人たちは、出てくる原稿とかその他の中身を読んでしまうわけです。そのために非常に知識水準は高く、おそらくロシア語も読める人もいたでしょう。

この雑誌にこう書いています。「我邦労働運動の鼻祖たりし片山潜氏は去る8月14日より20日までオランダ国アムステルダム市において開催した万国社会党大会において副議長に選挙せられ、露国代表者、プレカノフ氏と握手せられたりといふ」（『誠友』第50号、04年8月25日）という記事が載っています。

つづいて、「これ以上美しい瞬間はこの大会にはなかった」と、『イスクラ』には書かれているそうです。私は確認していません。「この握手や、是れ実に世界の社会党発達の歴史において、永く特筆大書せざるべからざる重大な一事実」と幸徳秋水は『平民新聞』第45号（04年9月18日）で書いています。そしてプレハノフは、「日本のプロレタリアートに戦争をしにかけているのはロシア人民ではなく、ロシア人民の最悪の敵、ロシア政府である」と演説をしています。そして片山はそれを受けて、「日露戦争は畢竟両国における資本家政府の行動に過ぎずして、為に両国の労働社会は至大の損害を受けざるべからず」と述べました。そして、この大会の決議では、「大会は資本主義と自国政府の反対により、殺戮されている日本とロシアのプロレタリアに兄弟の挨拶を送る」というふうに述べています。

次に、日露戦争に関して活版工はどう思っていたかを紹介します。「活版工諸君、諸君は日露戦争によって露国人を一概に非文明的人種なり、野蛮なりと評下すれども、予は活版工として露国活版工を見れば、むしろ彼らが文明的職工にしては我が活版工こそ非文明的なり。なんとなれば、露国活版工は組合を組織して団結の下に一致の行動をなしつつあるなり。軍資献納金もよし提灯行列もよし、しかれども空腹をしのび寒気を耐えてまでなす必要なきなり」と、はっきりと述べているのです。

今度は、有名な与謝野晶子のことについて述べたいと思います。「君死に給ふこと勿れ」という詩は、最近だんだん教科書から消えつつあるということもありますが、今でもよく知られている詩です。この「君死に給ふこと勿れ」という詩が、当時大町桂月の天皇への不敬であるというところか、国賊であるみたいな批判がありました。その後、言わば非戦のシンボルとしてこの詩が大変有名になっていくのですが、最近だんだんと別の評価が出ています。まずご遺族の方の意向なのですが、この詩の「君」、弟は与謝野家の跡取り息子なので、それで死んで欲しくないという、ただそれだけの詩だという評価の仕方がありますし、与謝野晶子は徹底的な天皇主義者であるということ述べる研究者の方もいらっしゃいます。しかし、私はもう一度再評価したいと思います。つまり与謝野晶子の詩をもっと素直に見れば、人を殺すために産んだのではないと言っているところもヒューマンイズムの視点をしっかりと持っているものであったし、天皇主義という言葉に関して言うと、明治や大正期の日本人は大なり小なり天皇主義だったと思うのです。もし反天皇主義者だとすれば、牢屋に入るしかないという現実であったというのは事実ですから、そういう意味でそのあたりは大目に見てと思いますし、与謝野晶子はやはり婦人参政権の運動に直接関わっているわけで



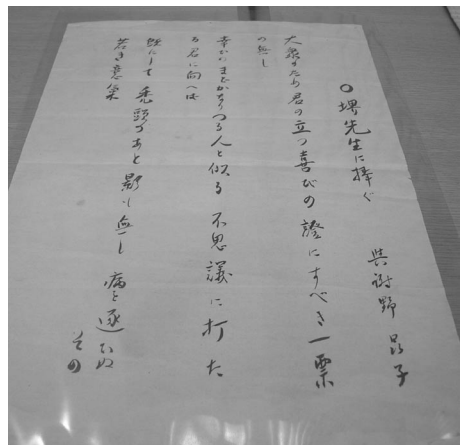
す。そこで詩を紹介したいと思います。「堺先生に捧ぐ 与謝野晶子」これは堺利彦の蔵書の中から出てきたものです。本邦初公開となります。これには三首の短歌があります。まず1つ紹介します。「大衆のため君の立つ喜びの証にすべき一票の無し」。これはまだ確定的とまではいかないのですが、堺利彦は1929年に東京市議会選挙に出て当選しています。その翌年に衆議院の総選挙があって、そこに立候補して落選しています。そのどちらかだと思います。やっぱり総選挙の方ではないかなと思うのです。なぜかと言うと「一票の無し」、これはもちろん婦人参政権がないということを行っているわけであって、そうすると総選挙の時にこう断言しているのではないのでしょうか。しかし、これはあくまで憶測です。このように与謝野晶子は堺利彦に接近していき、その思想にも共鳴していた

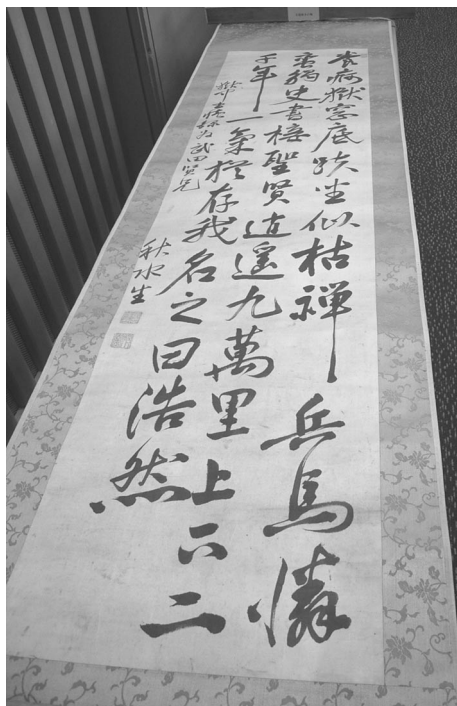
人なのです。だから決して天皇主義ということで一蹴はできないというのが私の結論です。

あとは読み上げるだけにします。「幸ひのまどかなりつる人と似る不思議に打たる君に向へば」。この「君」はもちろん堺利彦です。「既にして禿頭のあと影も無し病を逐いぬその若き意気」。これが1930年と仮定しますと、堺利彦が病気を患うのです。そしてちょっと良くなるのですが、32年くらいからまた悪くなって33年に亡くなったのです。その時に「帝国主義戦争の絶対反対の声を聞きながら死んでいくことを幸せに思う」というような内容のメッセージを堺は送っています。だから最後の短歌は、病を追い出したけれど、若き意気で頑張ってくださいという励ましの短歌だと私は思います。

さて、1904年11月13日、幸徳、堺が共産党宣言を訳します。そして週刊『平民新聞』に掲載され、発禁となっています。発禁のことについてひとこと言っておきます。「嗚呼増税」、「小学校教師に告ぐ」、それから「父母を蹴れ」、そして「共産党宣言」、この4つが発禁になっていますが、これでお分かりのように、非戦論が1個も入っていません。内容的には道徳的なものが多い。「父母を蹴れ」なんていうのは許さんということでしょう。非戦論を訴えた与謝野晶子の詩の『明星』は禁止になっていません。それから大塚楠緒子の「お百度詣で」も禁止になっていません。『平民新聞』の非戦論を唱えたものも発禁になっていないということで謎がありますが、これは結論を出すのをちょっと控えておきたいと思います。

ここに『平民新聞』発刊1周年記念の幟があります。これは04年11月13日に予定された滝の川での園遊会の時のものです。この園遊会は禁止になりました。





その理由は、ちょうど前号の共産党宣言の禁止に関わっているのではないだろうかと思います。『平民新聞』第54号に園遊会禁止の記があります。この幟は幸徳秋水がしたためたものです。この幟の横には「明治37年秋、週刊『平民新聞』1周年園遊会の時に幸徳秋水が書きたるもの、今や好個の記念物として残存す。大正11年夏、堺利彦識」とあります。

翌年1月には、大塚楠緒子の「お百度詣で」が発表されます。そして1月11日には週刊『平民新聞』発禁で幸徳秋水らに禁固刑が出されます。そして1月29日、週刊『平民新聞』がとうとう廃刊となって、マルクスの『新ライン新聞』終刊号にならって全紙面を赤刷りで出しています。弾圧とそれに関連して財政事情のために廃刊にしますが、まだまだ明治社会主義運動は終わってはいません。

幸徳秋水がこういう形で入獄しますが、この後に以下の武田九平宛掛け軸が書かれたと思います。これは

大原社研が所蔵しているものです。武田九平というのは、大逆事件の被告で、大石誠之助と大阪平民社に出入りしてしまっていて、それで死刑になり、無期懲役に減刑され、29年に出獄しているという人です。なかなかこれが読解できず、私の力ではどうしても数文字が分からなかったもので、柏書房で古文書の研究をなさっている小代渉さんに読んでいただいた部分もあります。「病を獄窓に養い」とありますので、この掛け軸が牢屋に入った後に書かれたものに違いないと思われます。

その後の2月『直言』が刊行されています。それが『平民新聞』の後継紙となります。上野で4月開催予定の労働者観桜会が禁止されて、街頭デモになってしまって警察とぶつかり、屋外では無理だということになって、5月1日、平民社でメーデー茶話会が行われました。これは日本最初のメーデー集会ということで、平民社の社屋が鈴なりになるくらいに人が集まったといえます。

9月になると、日ロ戦争のポーツマス条約が結ばれ、それに対して日比谷焼打事件が起こります。そしてそれを批評した『直言』が発行禁止となり、平民社は10月一旦解散します。その後、明治社会主義者たちが2つに分かれます。キリスト教社会主義者の人たちが『新紀元』、そうではない人たちが『光』を出すのです。

次に、赤旗事件について述べたいと思います。赤旗事件は、山口孤剣の出獄歓迎会が神田錦輝館で開催され、その時に荒畑寒村や大杉栄らが赤旗を掲げて場外に繰り出し、警官隊と衝突し、14人が検挙されたという事件です。その時の赤旗の写真がありますが、その旗は2本あります。赤字に白いテープで「無政府」、「無政府共産」とあります。荒畑寒村の『うめ草すて石』によれば、「前の晩に赤地の布を買ってきましてね。僕が部屋借りをしていた部屋のかみさんに頼んで、内職のミシンで白いテープの字を縫いつけてもらい、それを持って出掛けたんです」（荒畑寒村・向坂逸郎『うめ草すて石 思い出の人々』至誠堂、昭和37年）。これには信憑性があるかどうか。ミシンがそ

の頃あったのかどうかということですが、ぎりぎりです。ほんの数年前に日本の会社にシンガーミシンがアメリカから輸入されていたのですが、日本製のミシンがやっと数年前に売り出されたということで、家のかみさんが持っていなかったのではないかとということです。工場がミシンを貸し出して、内職をやらせていたかもしれません。そうすればこの話の信憑性はあるかなと思います。

さて、そこでこの旗を見て下さい。これはもちろんご覧になっている通り、全く赤旗事件の旗とは関係ないのですが、なぜ持ってきたかという、この作りが同じなのです。赤地にテープを貼り付けていますよね。しかも端っくに「堺」と縫い取りがありますね。小さく堺利彦の「堺」があるので、あくまでもこれは状況的な説明しかできませんが、赤旗事件の赤旗が作られた頃に作られたと思われます。1面には「社会主義」と書かれていますが「社」の字がはがれています。ところで堺利彦は、社会主義と無政府主義、「どちらもあり」という中間派なのです。それで裏面に socialism と英語で書いたのではないのでしょうか。明治社会主義者の人たちはドイツ語ではないのです。英語なのです。ただ「socialism」と書いて、それを読めた日本人が何人いたか、やはりインテリの運動だと思いますね。この旗は、赤旗事件のものと作りが似ているということです。大正期以降になると、旗は労働組合の組合旗と、もう1つはメーデー旗で広がっていきます。これは、たいてい染付けで作っているわけで、こんなテープを貼って作るようなものはやはり明治的社会運動の状況のような気がするということです。

いずれにしても、この旗には次のようないわれがあるそうです。堺利彦が大原社研に持ち込んだ。値段はちょっと分かりません。堺は大原社研をよく利用していたのです。堺だけではありません。労働組合とか思想運動の団体が大原社研にいろんなビラなどを持ってきました。ビラの場合は1枚5銭だとかで買っていたのです。ポスターも買いましたし、それからこういうような現物もお金を出して買っていたということです。



さて、最後にまとめを簡単にします。確かに日ロ戦争の時には非戦論の考え方は圧倒的少数派であることは事実で、多くの国民は主戦論に傾いた。でも私はこう思います。現在でも与謝野晶子の詩や内村鑑三の非戦論について語り継がれているというのは、事実だと思います。そういう意味では歴史に残っているのではないだろうかと思います。しかし、なかなか今の現状はご存知の通り、非戦を貫くには厳しい状況にあるわけです。だからこそ、そういう中にあって、これからも非戦の思想を国民の中に広めていく必要があるのではないかと思います。歴史の教訓から言ってそうだと思います。その際に、今回紹介した矢部喜好というキリスト教の立場に立った、素朴でヒューマニズムにあふれた人の非戦の思想も広げていくべきではないかと思います。以上で終わらせていただきます。

（うめだ・としひで 法政大学大原社会問題研究所研究員）